

第 2 1 回 協力隊運営委員会議事録

(昭和 5 4 年 9 月)



青年海外協力隊事務局

第 2 1 回 協力隊運営委員会

議 事 要 録

1. 日 時 昭和 5 4 年 9 月 1 7 日 (月) 午後 6 時 3 0 分
2. 場 所 日本青年館 4 階 東洋軒 「松の間」
3. 議 題 青年海外協力隊の派遣前訓練について
(派遣前訓練及び技術補完研修の方向について)
4. 出 席 者 衛藤藩吉委員、加藤孝光委員、 今日出海委員、
末次一郎委員、内藤幸彦委員 (以上五十音順)
法眼総裁、荒勝副総裁、橘理事、佐々木理事、
黒河内事務局長、宮持次長 (兼広尾訓練所長)
大畑駒ヶ根訓練所長、高橋国内課長、粕谷参事、
松崎管理課長
5. 提出資料 協力隊の教育・訓練のあり方について

国際協力事業団	
受入 月日 '84. 9. 13	000
登録No. 14991	36
	J-V

JICA LIBRARY



1018758C1J

(議 事 要 録)

——— 提出資料 Ⅱ 1 「協力隊の教育・訓練のあり方について」
に沿って黒河内事務局長が訓練の現況をも含めて説明、特
にケース・スタディに関して国別、職種別テーマ設定の考
え方、駒ヶ根において実行している所外活動についてふれ
る。———

(加藤委員) 所外活動について中身など詳しく知りたい。

(大畑駒ヶ根訓練所長)

——— 概ね隔週土曜の午後を所外活動にあて隊員候補生を7～
8班に分けて社会福祉施設に出向いての世話活動、農家へ
の援農等を実行している現況を説明 —— 寝たきり老人の
お世話をするグループもあるが日曜日にも自分たちの方か
ら出かけていつて話し相手になる者もあり、また重度の精
神障害者を見た隊員候補生は、まず第一週はショックを受
けるが第二週からは、自分たちがいかにかれらにかかわる
かを真剣に相談し合うなど自主的な動きにすすんでゆく。
今後もぜひ続けてゆきたい。

(内藤委員) ①帰国隊員の現地活動を訓練へ充分フィード・バックが
されているか。自分もかつて代々木訓練所の訓練に協力ス
タッフとして参画したが、よい隊員像は何かと追い求めて
訓練に当たっていたと思う。隊員が不幸にして亡くなった

事例には共通したものがあるであろう。また活動の失敗例を追跡してもっと明らかにしてそれらへの対処を考えることにより、よい隊員像をつくり上げることができるであろう。それが選考にも生かされるのではないか。こういうデータが集まつたならば専門家にも分析してもらつて、性格のチェックができるし、例えば酒好きとか生活破滅型などを見出して訓練、指導に効果を出すことが可能であろう。

②自分は選考時に個人面接に参加しているが、選考の状況を見ると技術の評点によつて合否が決まるという印象を受ける。しかし技術面接を受けたのに受験者の中には、技術の質問はあまりなかつたという人もいた。本当に技術試験には、一貫性があるのだろうかと思つた。特に二次試験の技術面接にはそれ相当の考慮を払つてほしい。

③29カ国の派遣国（注——派遣取極を結んだ国の数）から研修生を協力隊がひとりずつでも受入れて訓練所に参加させることは、今は無理としても将来展望として可能か。駐在員事務所の現地人スタッフをかようなプログラムに入れることができれば相互理解は格段に高まる。エチオピアの事務所の現地人秘書はその対象として充分価値がある。文化訓練・異文化の理解にも役立つ。

（事務局長） 貴重なご意見感謝する。

①フィード・バックについては充分考えてやつているがさらにご趣旨が生かされるようにしたい。ただ参考までにいえば死亡例は不幸にも13を数えるが交通事故によるも

の6例、最近の2例はマラリアにからむ病死であつて共通点を見出すのは難しく、両隊員とも頑健、酒好きであつたが、ご指摘のような生活破滅型とはいひ切れない。

②技術試験の専門委員は、事務局としても出題の仕方、選考の方法まで充分検討、協議して、適当でない方がいれば更迭することも含めて対応している。詳細は選考担当の国内課長が補足することとするが、技術面接には単に技術の事柄だけではなく、持てる技術が途上国の状況の中でどう生かされるかをはあくするために仕事の環境、生活の面や受験生の人柄や趣味にまで質問が及ぶことは充分あり得るし、現に専門委員の中にそういう人もある。

③研修生としての現地人スタッフの受入れは夢として持つている。なおネパールの隊員、隊員OBが浄財を集めて現地人のクラークを日本に呼ぶことを計画し近く実現する。

(高橋国内課長) 技術試験の評点だけで合否を決めることはない。実態を正しく言えば、受入国から資格条件を決めてくるものが少なからず、それに合わない場合は人物、語学がすぐれていてもやむなく不合格にすることがあり、要請の内容条件に合致するか否かが合否にかかわるといふことである。

(加藤委員) 内藤委員の言う研修生受入れに関連して、現地で隊員のいわば「協力員」に当たる現地人の養成ができれば、またそのような「協力員」の受入れができれば、と考える。参

考までに例をいうと農家の指導に当たる改良普及員の制度があるのは周知のことだが行動力がある農家を協力員として選定することもある。

(末次委員) (1)所外活動は初めての事として評価はするが、もう一歩をすすめて4回のうちの第1回目は地域社会に何が還元できるかを初めから示すのではなくて、問題を与えて一日中町を歩かせてその結果何をするか、何をすべきかを決めさせる方法をとることを考えたい。子供たちとのつながりをもつ具体的計画を立てる者もあろうし環境浄化も一策であろう。ネパールに行つた時、看護婦隊員が病院の中に芝生があつて子供の遊び場をつくつてやりたいといつて、その発想はよいがネパール政府にその実現を要求しようという方向に傾いた。しかし都市計画の隊員もいるのだし、自分たちで土、日曜を利用して皆でやろうということに転換した。かように要求マインドでなく自分たちに何ができるかと考え討議する方式が大切である。

回を追つて自主的な動きに変わつてゆくことも結構だが、自発性を刺戟するには、福祉施設への協力などと限定せずにメニューを与えず巾広く考えさせることである。ボランティア性を高める観点から手法としてぜひ考えてほしい。

②“手づくり”の訓練という説明があつたがその言葉は判る。しかし誰が誰を“手づくり”するのか。隊員候補生は未成年の子どもではないのであつて、お互いの切磋が一番大事である。(協力隊の)スタッフが説教し教えてやる、

号令をかける、ということであつてはならない。従つて、提出資料の中に「訓練は“手づくり”の基本性格を堅持し、一回百人程度が“手づくり”の限度」であつて百人をこすのは困るというのは大いに異論がある。“手づくり”という考え方に危険を感ずる。

(事務局長) 所外活動についてのご意見については訓練の基本方針であるボランティア性の喚起につながる観点から検討させて頂きたい。また第2のご指摘に関しては、候補生に号令をかけるなどという考えは全くなく、人間と人間との接点を大切にするという趣旨で表現したものであるのご理解願いたい。

(加藤委員) ①所外活動とボランティア性についての末次委員のご意見に同感である。これがボランティア活動なのだといつて入つてゆくのとボランティアを意識せずに入つてゆくとは大いに違う。自分はボランティアだと感じないでボランティア活動をやるところに意義があると考える。②質問したいが広尾、代々木の両訓練所と違つて駒ヶ根訓練所で初めて選択された個室について功罪はどうか。

(大畑所長) 現時点でいえば個室の長短は五分五分といえる。新しい言葉つまり現地語を勉強する候補生にとつては、1時間でも貴重であつて個室という施設の利点をフルに活用している。消灯、就寝など生活上の自己管理の効用もある。健康

管理上でも心配はない。しかし他面、切磋琢磨の場は集会所として利用しているが、それをフル利用しているとはいえず、場の利用、話し合いができていない。土曜の所外活動のあと、及び日曜日が候補生同士の歓談交流の機会であり、日曜から金曜までは勉強、宿題に追われているという実情である。

(加藤委員) 個室では「己れに克つ」という一面がある。

(大畑所長) 一次隊の候補生が残念なことに個室で飲酒するという事件をおこした。訓練期間中の所内における禁酒は、くり返し明示、説明したところであり、甘えを排除する観点から退所の処分をとった。

(末次委員) 訓練を受けている候補生からのコメントとして、訓練所のスタッフに対する候補生の馴染みが少ないということを知った。

(粕谷参事) 今年は駒ヶ根に訓練所ができて初めての訓練であつて、スタッフも初体験、候補生にとつても初めての場所であるから問題点はある。個室についてもしばらく時間をかけて観察し考えたい。個室によつてセルフ・コントロールを強めるか、ごまかしがありはしないか等注意を払う必要がある。

——— 議事進行について末次委員より発言があり、訓練についての今後の審議にも関連して協力隊の業務の見通し、分析

と中・長期の将来展望をえがくべく運営委員会の中にそのための特別研究委員会をつくることについての提案をしたい旨述べ、全員これを了承し訓練にかかる審議は次回続行することとし、末次委員より提案の内容を記述したペーパー「協力隊の将来展望と現状点検のための特別研究委員会の設置に関する提案」（添付）を全員に配つて趣旨説明に入る。—————

（末次委員） 趣旨は記述してあるが簡潔に話す。協力隊は“人による協力”が強調、重視されている今日、量質ともにのびる方向にある。

しかし現状のままで要請、応募、派遣の数をただふやすということではいけない、長期的視野に立つて将来の構図をえがくことが必要である。そのためには現状の点検、分析をやらねばならないが、また事務局も業務の点検、改善に努力しているとは思いますが、日常業務に追われているとなかなか物事を巨視的に見ることは難しい。従つて事務局から距りをおいて少人数の研究グループを設け、運営委員会のもとにおいて現状を整理、点検しつつ長期展望と改善計画をつくつてみようという提案である。その目標を年度末において研究、検討の結果を運営委員会にレポートしてもらおう。それを2回ほどここで討議して6月一ぱいに、例えば“7カ年倍增計画”といったものを作り56年度の予算要求に反映できるようにしたい。

10月早々には協議を始めるぐらいでどうか。委員は少

数にしほり、運営委員会から1～2名、隊員OBや、育てる会からそれぞれ1～2名ずつ、計6～7名が適当かと思う。現地をさりげなく見に行くことも考え、手きびしく現状チェックを要しよう。

予想される検討課題としてかなりくわしく別記しているが、いずれも例示的にあげたのであつてこれにこだわることはない。要は早くスタートさせることである。

(法眼総裁) 主旨はよく判る。事務局は日常の仕事に忙殺されて業務を分解、分析することは容易ではない。そのような検討は重要である。

(末次委員) このための費用はじめ財政上の問題もあろうが育てる会から委員を出すとしても手当は不要である。ボランティアとして動くことがよい。

(佐々木理事) 末次委員の提案は結構と思う。常日頃事務局長はじめ事務局の諸君にも業務の検討、改善をはかるよう指示しているが、第三者、事務局の外部の方々がどんな事柄を考えておられるか、アイデアが得られると思う。具体的には事務局長の考え方も反映することになるか、スタディ・グループから事務局長等の考えを聞くのか、直接各方面にたずねるのか、いかがなものだろうか。

(末次委員) 役所の審議会のようなになるのであればやめた方がよい。

協力隊のことをわかつていて自由な発想ができる人が大切である。担当課長に来てもらって意見を聞くのもいい。現実とはなれてはいけませんが、事務局長はメンバーには入れない。実務者ならばあきらめるところを、なんとか困難をのりこえて問題提起をしてもらうのがよい。事務局いじめやあら探しをするわけではない。

(加藤委員) 本日提示された事務局のペーパーは全体としてよく考えてつくつたと思う。末次委員のご意見ご提案も協力隊について網らしているといつてよく将来へ向かつて実現へのステップを突込んで考えてゆくことも大いに意味がある。総論、各論をふまえてさらにえい智を結集する仕方で論議を集めて頂きたい。

(内藤委員) O Bとして、協力隊とは何かを、国際協力と人づくりと二つの役割を担っていることを突込んで論議してほしい。

(衛藤委員) 各委員のお話をうかがつていても大変結構なことだと考える。総裁の英断でこの研究委員会をぜひ作つて頂きたい。長い将来をみるとよいことである。事務局長は、面倒なことだ、うるさいことだ、と思われるかも知れないが、協力隊も1.5年経つていろいろ反省すべき時期にいるのだから。創立の時点から協力隊を考察し続けてきた末次委員にはぜひ入つて頂きたい。O Bについては事務局から離れて意見を述べることができる人、評論家的な人でなく、また学識

経験者はいない。こういう人はとかく言行不一致なものであり「行」が大切で「言」は違者（なく）よいのである。

(末次委員) 人選の問題は事務局長とも打合せたい。

(総 裁) 末次委員の提案は賛成であるからとり急ぎ研究することとしたい。

(今 委員) 協力隊は人づくりに結びついていてよいことばかりだ。しかし難しく考えずに協力隊は普通の人として扱うことが大切だ。途上国へ行つて苦勞するだろう大変だろうと考えずにもつと普通に見てやることだ。

(末次委員) 駒ヶ根訓練所長は訓練生を面接しているというが、訓練生が何回相談に来たか相談件数はどうかと聞くと、それが判らない。所長室に来ることが相談ではないし訓練生とは日常的な接触が大切である。その点はさらに討議したい。

(加藤委員) ところで先刻の研究委員会についてだが事務局長は入れないということになると、その後の持つてゆき方の上で不便ではないか。少なくとも同席するのはどうか。

————— 末次委員提案の件について黒河内事務局長よりしめくくりとして委員会をつくることを前提として、人選については種々相談した上総裁と連絡し、10月上・中旬には決定

できるよう調整する旨発言、了承 —————

さらに続いて事務局長からインドシナ難民に関する U N V のアプローチの現状について口頭説明、関連して末次委員及び総裁から① U N V と問題を煮詰め②協力隊に何をやってほしいかを明らかにし③可能なことはすぐにも着手すべし等と発言があり、次回は 1 1 月上旬 6 日ないし 8 日が好都合との意見あつて閉会。

